

深夜二時。シェアハウスの静まり返った廊下を通り、私は駆け込むように共同のシャワールームへと足を踏み入れた。このシェアハウスは、都心に近いわりに家賃が格安という理由だけで選んだ場所だ。築年数はそれなりに経っており、リノベーションされているとはいえ、廊下の床は歩くたびに微かに軋む。

住人は私のような薄給の会社員から、フリーランスのクリエイター、夢を追う学生まで多種多様だ。皆、生活リズムがバラバラで、深入りしすぎない絶妙な距離感を保っている。

(……やっと、終わった。もう、一步も動けない……)

連日の残業で、頭の中は泥のように重かった。

季節外れの風邪が社内で大流行し、バタバタ倒れていく中で生き残ったわずか数人でなんとか業務を回していた。健康的な自分の身体が恨めしくもあった。

(でも、やっと、今日はこれで週末……)

すぐに寝たいけれど、身体は洗いたいし、メイクは落とさないといけない。眠気で朦朧とする意識の中で扉を閉め、もたつきながら服を脱いで浴槽に向かう。

ザーッ。

(ああ……あったかい。生き返る……)

勢いよく降り注ぐ熱いシャワーが、こわばった肩を優しく解していく。真っ白な湯気が狭いブースに立ち込め、視界を白く塗りつぶしていく。私は目を閉じ、ゆっくりとお湯に当たった。

(ふう……。明日はお休みだし。昼過ぎまでずっと寝ていようかな……っ)

シャワーの流れる音と、配管を流れる水音にかき消されて、外の気配など何も聞こえなかった。だか

ら――。

ガラッ……！

唐突に、背後の引き戸が開いた。心臓が跳ね上がり、反射的に振り返ると、湯気の向こう側には人が立っていた。

「あれ、ごめん！ 鍵開いてたから、てっきり誰もいないかと思っちゃった」

「……………えっ！？」

申し訳なさそうに笑う、響也さんだった。

(……え？ うそ。響也さん……っ！？ なんで、今……っ！？)

響也さんはシェアハウスの一員であり、フリーのアーティストらしい。

背が高く、すらりとした体つきに、どこか無造作に伸ばした金髪。彫りの深い整った顔立ちはモデルのようで、少し気だるげに伏せられた目元や、低く

落ち着いた声まで妙に色気がある。何気なく着こなす服もセンスに溢れていて、ただTシャツとデニムを着ているだけなのに、雑誌のスナップ写真のように様になってしまう。

シェアハウスの住人の間では、彼が相当モテるという話が絶えず、常に誰かしら女性の影がちらつくような、私とは住む世界の違う人だった。

密かに憧れてはいたけれど、彼とは生活リズムが違いすぎた。そもそも響也さんもほとんど家には帰ってこない。たまにリビングですれ違う際に軽く挨拶を交わす程度で、まともに会話をしたことすらほとんどない。

そんな彼が、今、目の前にいる。風呂場に。

（待って、なんで！？ 鍵、かけたはず……っ！ 嘘、私、かけ忘れてたんだ……っ！）

パニックで頭が真っ白になる。私は全裸で、身体を隠すものなんて何もない。シャワーの水飛沫が、容赦なく私の身体を濡らし続け、肌を露わにしてい

く。

「きゃっ……！」

「……あはは、マジ？ そんなに驚かなくても♡ ……え、その反応なに。かわいいじゃん♡」

響也さんは出て行くどころか、ひょいと軽い足取りで脱衣所から洗い場へと入ってきた。いつも遠くから眺めていた、あの整った顔が近づいてくる。ノリは軽い感じで、軽薄なお兄さんそのもののトーン。それなのに……。

（じっと見られてる……。どうしよ、なんで？ 出ていってくれないの……？）

じり、と彼との距離が詰まる。狭いシャワールームに、彼の纏う煙草と爽やかな香水の混じった匂いが、湿気と共に濃密に押し寄せてくる。

「っ……きよ、響也さん、だめ。出てって……っ！」

！」

（やだ、こんな、全部見られちゃった……っ！！）

出口には響也さんがいるから出られない。あいにくとバスタオルは外だ。私は腕で必死に身体を隠すようにした。

「えー、そんなに嫌がらなくても♡減るもんじゃないし、ね？……っていうかさ♡」

響也さんが私のすぐ目の前まで来ると、濡れた壁にそっと手を突いた。逃げ場を塞がれ、至近距離で彼の端正な顔が迫る。ピアスの色も模様もはっきりわかるような、近い距離。

「……へえ。君、脱いだらそんなに綺麗な身体してるんだね♡」

「っ、あ……」

響也さんの視線が、私の鎖骨、震えるおっぱいの

膨らみ、カーブした腰のラインを、まるで獲物を愛おしむように優しく舐め回していく。憧れの人の視線に晒されている事実、頭がどうにかなりそうだった。

「普段は地味な格好してたのに、脱いだらすごい綺麗なラインしてるんだね♡」

「や、めて……見ないで……っ」

「……ねえ、もっとよく見せてよ♡ 君がどんな顔をするのか……俺が、隅々まで確かめてあげたいな♡」

（響也さんの指が、肩に……っ！）

彼はそう言って、濡れた指先で私の肩に手を置いた。

「ひゃあっ♡」

「あはっ、いい反応♡ ほら、そんな顔してたらさ……勘違いしちゃうじゃん♡」

「っ、あ……ち、違います……っ♡」

（逃げなきゃ……！でも、後ろは冷たい壁だし、前には響也さんが……っ）

シャワーブースの狭い隅で、私は完全に追い詰められていた。逃げ場を求めて視線を彷徨わせるが、目の前には濡れたシャツから逞しい胸元のラインが透ける彼の身体がある。

逃げようとして横をすり抜けようとした瞬間、彼の長い腕が、私の退路を通せんぼするようにして、壁に置かれた。

「どこ行くの？ まだ化粧も落としてないじゃん♡
せっかくだから、俺が落としてあげるよ♡」

響也さんの声は、いつものリビングで聞くような明るくて優しいトーンだ。

なのに、その響きには逃げ道を一切許さないような、抗いがたい、絶対的な圧が含まれていた。

「い、いいです、いいです……っ！ 自分でできま

すからっ！」

「遠慮しないで♡ 勝手に見ちゃったお詫びだし、俺、こういうの得意なんだよね♡」

「そ、そんなっ、大丈夫です……っ！」

「しっ。……そんなに大きな声出したら、みんなに聞こえちゃうよ？♡」

「っ……！」

（どうしよう、誰か……。でも、もし誰かに気づかれたら……こんな無防備な姿を見られたら、私、もうこのシェアハウスにはいられない。恥ずかしくて死んじゃう……っ！！）

声を押し止めた私を見て、響也さんは満足そうにフッと口角を上げた。彼は私の耳元に顔を寄せ、熱い吐息を吹きかけながら、とびきり甘く囁く。

「……ちゃんと洗ってあげるから♡ でもさ、その前にちょっとだけ撮らせて？♡ 君があまりに綺麗だから……今描いてる絵の資料に使わせてほしいんだ」

「っ……！？ な、なな……っ、何を言ってるんですか……っ」

（そんなの、無理……っ！ 裸を撮られるなんて、絶対に嫌……っ！）

「大丈夫、悪用なんてしないから♡ 後でモデル料もたっぷり払うし、俺と君だけの秘密ってことで♡ ね？♡」

「で、でも、それは、ちょっと……っ！」

しっかり断らなければいけない。それなのに、至近距離にある響也さんの整った顔があまりに美しく、気圧されて目を合わせることもすらできない。

（鼻先が触れそう……っ。響也さんの纏う香水の匂いが、湿気と一緒に肺の奥まで入り込んできて、なんだかクラクラしちゃう……っ♡）

私が羞恥で顔を真っ赤にしていると、響也さんは確信犯めいた笑みを浮かべて、ポケットから防水ケースに入ったスマホを取り出した。

「あ、いい顔♡ ねえ、君のその身体、本当にラインが芸術的なんだよね♡ 今頼まれてるCDジャケットのコンセプトにぴったり。最高のインスピレーションだよ♡」

カシャッ！

「きゃっ！？ っ、あ、待って、響也さんっ！」

カシャカシャ！ カシャッ！！

（嘘、本当に撮ってる……！ なにもつけてない、裸を……っ！）

無機質なシャッター音が、狭いブース内に響き渡り、私の頭の中に直接突き刺さるようだった。恥ずかしさで全身が燃えるように熱い。私はたまらず両手で胸を隠そうとしたが、響也さんの大きな手が私の手首を優しく、けれど強引に掴んで頭上の壁に固定した。

「あー、隠さないでよ。もったいないじゃん♡ ほら、もっと腰を反らせて。……そう、そう！ その角度、光の当たり方がマジでエロい……あ、いや、綺麗だね♡」

カシャッ！ カシャカシャッ！

「やだ、やだぁ……っ！ は、はずかしい、です……っ♡」

「はずかしい？ でも君、すごく扇情的な身体してるよ♡ ねえ、こっち向いて♡」

ぐいっ、と顎を細い指先でそっと掴み上げられた。そしてそのまま、水滴と熱気で白く曇った鏡の方へ無理やり顔を向けさせられる。

「……ほら、見て。鏡の中の自分。……自分の身体が、今どんな風に俺にどう撮られてるか、ちゃんと見なよ♡ ほら、自分でも興奮してこない？♡」

「ひぁっ……！♡ 見たく、ないです……っ」